

本町遺跡第41次発掘調査報告書

平成26年（2014年）10月31日

豊中市教育委員会

本町遺跡第 41 次発掘調査報告書

平成 26 年（2014 年）10 月 31 日

豊中市教育委員会

序 文

本町遺跡は、弥生時代に出現し、古墳時代には桜井谷窯跡群で生産された須恵器を選別する集落として繁栄した遺跡です。これまでの発掘調査では、多数の掘立柱建物や竪穴住居のほか、須恵器の不良品が廃棄された土坑や豪族の居館と推定される庇付きの大型建物などが確認され、須恵器集散地としての実態が明らかにされつつあります。また、千里川上流域に展開する柴原遺跡や内田遺跡、羽鷹下池遺跡とともに、桜井谷一帯における須恵器生産の実態、さらに古墳時代における須恵器の生産体制を検討する上で重要な遺跡として注目されています。

今回の調査区の周辺でも、これまでに多くの発掘調査が行われ、古墳時代後期の建物や竪穴住居が発見されています。そして、今回の調査で確認された遺構も、これら周辺における発掘調査成果とあわせて検討することで、集落の実態を解明する手がかりになると期待されます。

このように、本町遺跡は豊中市の歴史ばかりではなく、古墳時代の重要な産業の一つである須恵器生産の様相を知る上で、非常に重要な遺跡として位置付けられます。そして、その重要性を明らかにする一端になったのが、今回の調査であったと言えるでしょう。本報告書は、そうした調査成果を余す事なく提示し、将来における歴史叙述あるいはその研究に資することを目的に刊行するものです。

調査にあたっては、株式会社 サンヨーハウジング名古屋をはじめとする関係者の方々に、種々のご協力を賜りました。ここに記して、厚く謝意を申し上げます。

平成 26 年（2014 年）10 月 31 日

豊中市教育委員会
教育長 大源文造

例　　言

1. 本書は、株式会社 サンヨーハウジング名古屋（代表取締役 宮崎 宗市）が行う分譲住宅建築に伴って実施した本町遺跡第41次発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、株式会社 サンヨーハウジング名古屋の依頼を受けて、実施したものである。調査は、豊中市教育委員会事務局 地域教育振興室 文化財保護チーム 主査 橋田 正徳が担当した。
3. 本調査は、豊中市本町4丁目108-2および108-8のうち、17.2 m²を調査範囲とした。発掘調査の期間は、平成26年（2014年）3月14日から平成26年（2014年）3月25日で、発掘調査報告書の作成にいたる遺物整理期間は平成26年（2014年）10月31日までとした。
4. 本報告で示した挿図中の北位は座標北（国土座標第VI系）を使用している。
5. 本報告で表記した土層色は、『新版標準土色帖 1994年度』に準拠するものである。
6. 当発掘調査に関するすべての成果は、豊中市教育委員会において管理・保管している。

目 次

第Ⅰ章 調査にいたる経緯と経過

1. 調査にいたる経緯と経過	1
----------------	---

第Ⅱ章 遺跡の環境

1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3

第Ⅲ章 発掘調査の成果

1. 基本層序	7
2. 検出した遺構と出土遺物	7
3. 総括	9

挿図・図版目次

第1図 調査地位置図	2
第2図 調査範囲図	2
第3図 市内遺跡分布図	5
第4図 調査地点と周辺の地形	6
第5図 SP02 土層断面	7
第6図 東区平面・断面図	7
第7図 SK01 出土遺物	8
第8図 西区平面・断面図	8
第9図 SK02 土層断面	9
図版1 東区全景	10
図版2 西区全景	10

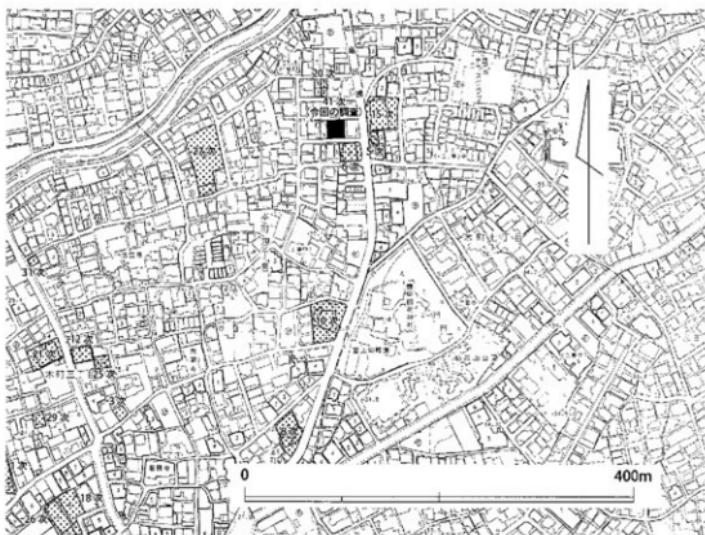
第Ⅰ章 調査にいたる経緯と経過

1. 調査にいたる経緯と経過

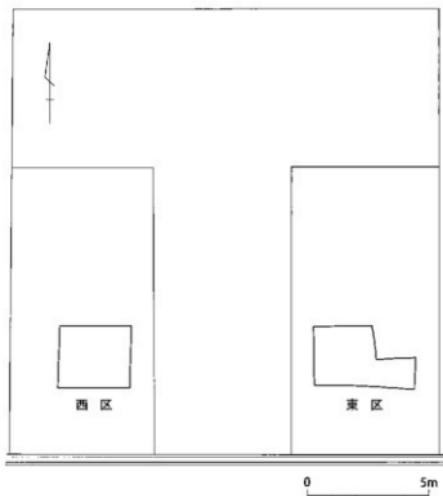
本町遺跡では、これまで 40 次の発掘調査が行われ、弥生時代中期後半に出現したあと、古墳時代後期には桜井谷窓跡群の操業に伴い、須恵器集散地として発展したことが知られている。また、各調査区では多数の竪穴住居や掘立柱建物が検出されるとともに、第 35 次調査区では底付きの大型建物 2 棟が発見され、豪族居館の可能性が指摘されているように、集散地遺跡の実態は次第に明らかにされつつある。

そうした中、本町 4 丁目 108 において、分譲住宅 3 戸の建築にかかる土木工事等に伴う埋蔵文化財発掘の届け出が平成 25 年（2013 年）3 月 12 日に提出され、これをうけて 3 月 25 日に確認調査が行われた。この結果、地表下 30 cm のところで、柱穴・土坑等の遺構を検出した。このあと、当敷地における分譲住宅の区割りが、3 戸から 4 戸へ変更されることになった。また、道路側 2 区画（108-2・108-8）の建物については、構造上の問題から深基礎を掘削することになり、改めて土木工事等に伴う埋蔵文化財発掘の届け出が提出された。これをうけて、深基礎の掘削部分について、平成 26 年（2014 年）2 月 7 日に確認調査を実施した結果、基礎掘削による遺構の損壊は避けられないことが確定した。

よって、農中市教育委員会と事業者は、埋蔵文化財の記録保存を行う必要から、発掘調査の実施について協議した。その結果、平成 26 年（2014 年）3 月 14 日から 3 月 25 日にかけて第 41 次発掘調査が行なわれることになった。また、整理作業については 4 月 1 日から 10 月 31 日にかけて行い、当報告書を刊行するに至った。



第1図 調査地位置図 (1 : 5,000)



第2図 調査範囲図 (1 : 400)

第Ⅱ章 遺跡の環境

1. 地理的環境

豊中市は旧国では摂津国に属し、西は猪名川を挟んで兵庫県と、また南は神崎川を挟んで大阪市に接する。その市域の西と南を画する二つの河川は豊中市南西端で合流し、そして大阪湾へと注ぎ込む。特に神崎川河口の一带は、古くより瀬戸内水運と神崎川・淀川水運が交換する流通上の要衝となり、その後背部に位置する豊中市はその恩恵を受けて発展してきた。また、豊中市の南北を縱断するように能勢街道が、猪名川流域の上津島から豊中台地中央付近に向かっては桜塚街道などが通るように、陸上交通も十分発達していたことも発展の背景にあったと推定される。

17世紀以降は都市大阪の近郊という環境のもと、市域の村落は商品作物の栽培を行うことで極めて安定的に展開する。そして、明治43年（1910年）の箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄宝塚線）開通を契機に宅地化が進み、現在では約37km²の市域に約40万人が暮らす北摂有数の住宅都市となっている。その一方で、商業都市大阪の近代化とともに、その玄関口にあたる本市には名神高速道路や阪神高速道路といった幹線道路や大阪国際空港など、陸空の交通機関が整備された。関西国際空港へ国際線が移転された現在においても、なお近代交通網における要衝の位置にあると言えよう。

一方、豊中市域の地形的特徴をみると、北から南に向かって標高が低くなること、起伏の乏しい穏やかな地形が指摘できる。市内北部の最高地点である島熊山（海拔約100m）から最も低い大島町付近（海拔1m以下）にかけての高低差は、およそ100mにとどまる。市域の北部には千里丘陵と刀根山丘陵と呼ばれる2つの丘陵（高～中位段丘）が、中部は主に千里丘陵から派生する中～低位段丘からなる通称「豊中台地」、南西部は神崎川・猪名川、その支流である天竺川などの小河川の沖積作用によって形成された平野部が広がっており、巨視的にみて三つの地形に区分できる。なお、本町遺跡は豊中台地北端の平坦部にあって、千里川の南岸に沿って展開する。

2. 歴史的環境

当遺跡の歴史的環境について、主に豊中市北部における各遺跡の展開から概観することにする。

旧石器時代 豊中市北部では、螢池北遺跡、螢池西遺跡、柴原遺跡などで旧石器時代の遺物が採取されており、この時期から千里川以北では、人類が活動していたことが判明している。特に、螢池西遺跡では細石刃の石核が出土するなど、遺物にまとまりがある。

縄文時代 豊中市北部において、当該期の遺構・遺物が確認された遺跡としては野畠春日町遺跡・野畠遺跡・内田遺跡・柴原遺跡・新免遺跡が挙げられる。ただし、これらの遺跡では遺構・遺物が散発的に確認されるだけで、竪穴住居などがまとまって検出されたわけではなく、人類の活動の実態はまだ明確ではない。

弥生時代 弥生時代前期の集落としては、勝部遺跡と山ノ上遺跡が挙げられる。弥生時代前期の集落は主に平野部に展開する傾向にあるが、その中で段丘上に位置する山ノ上遺跡で前期の遺構・遺物が確認されたことは、中期に展開する段丘上の集落の前提をなすものとして注目される。中期には螢池北遺跡と新免遺跡において、本格的な集落が展開するようになる。そして、中期後半には

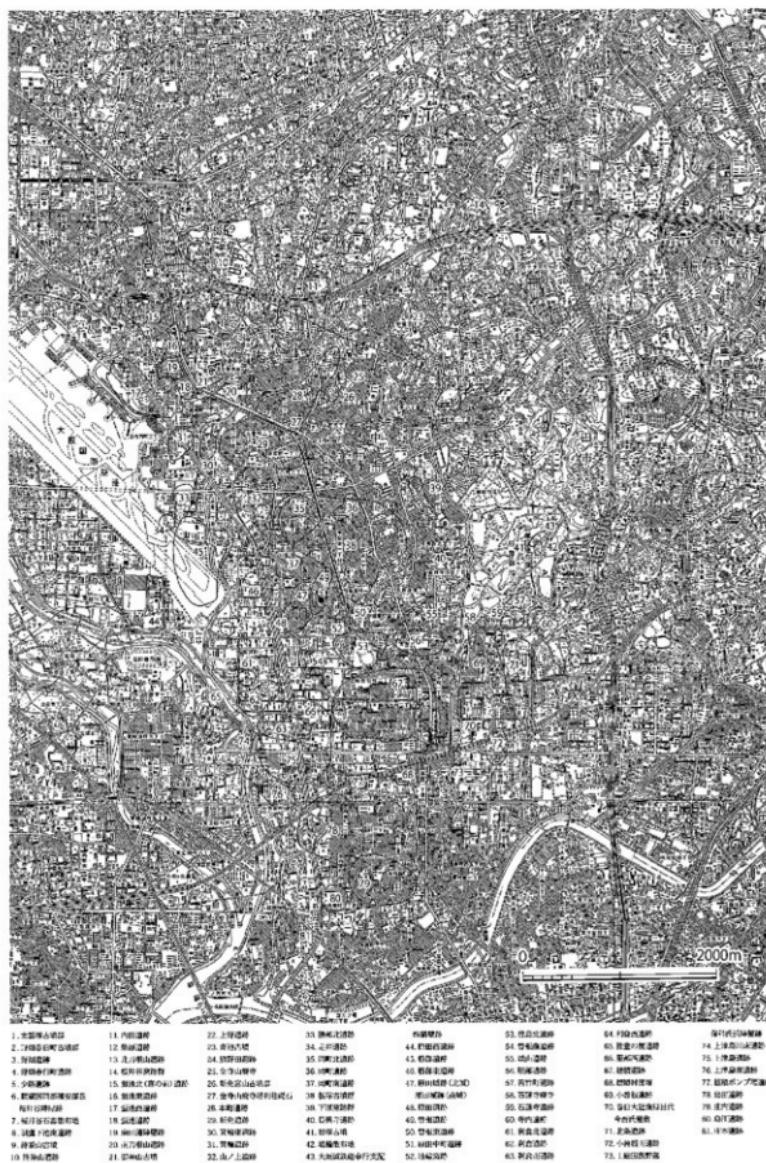
当遺跡や岡町北遺跡、山ノ上遺跡において集落が出現する。これらの集落は、新免遺跡の拡大にともなって出現した分村になる可能性がある。また、新免遺跡との関連性は不明であるが、この時期に豊中台地南西端の曾根遺跡においても集落が出現する。後期から終末期にかけて、新たに螢池西遺跡などが出現し、また中期に出現した集落は引き続き拡大する傾向にある。その一方で、中期に展開した螢池北遺跡や待兼山遺跡は廃絶する。

古墳時代 古墳時代前期になると、これまで段丘上に展開した集落の多くは衰退するか、廃絶する。現段階で継続することが確かめられているのは、新免遺跡と曾根遺跡、螢池西遺跡だけに限られる。本町遺跡に展開した弥生時代の集落も、古墳時代前期のうちに廃絶した可能性が高い。一方、この時期には、待兼山古墳や御神山古墳といった単独の古墳が段丘頂部につくられるようになる。中期になると、螢池東遺跡において大型倉庫群が段丘縁辺部に建設されるものの、短期間のうちに廃絶するなど特殊な状況を呈するようになる。また、新免遺跡においても、集落が再び本格的に展開しはじめるとともに、桜井谷窯跡群において須恵器生産が開始する。ただし、これまで古墳時代中期の所産と考えてきた2-2号窯は古墳時代後期の所産であることが判明し、操業が中期に遡る可能性は乏しくなりつつある。

古墳時代後期になると、桜井谷窯跡群の操業が本格化し、これに伴って本町遺跡と新免遺跡は須恵器集散地として活況を呈するようになる。また、6世紀後半には本町遺跡において居館の一部を構成する庇付きの大型建物が出現する。そして、古墳時代終末期には金寺山廃寺も建立されるが、新免遺跡の集落はこの時期に衰退しはじめるようである。

奈良時代 この時期になると、当遺跡における遺構・遺物は減少し、居館も廃絶すると考えられる。また、千里川上流域に展開した桜井谷窯跡群は、この時期をもって操業を停止する。一方、周辺の山ノ上遺跡や岡町北遺跡、岡町南遺跡では集落が散漫に展開する状況が看取できる。ただ、これらの集落も平安時代までは解体し、集落の形態は散村へと移行する。なお、曾根遺跡では8世紀末に超大型建物群に先行する建物群が出現する。

平安時代 当遺跡では平安時代前期の遺構は確認されていないが、これは集落形態が散村へ移行したこと求められる。この後、建物群が確認されるようになるのは、11世紀後半以降のことになる。しかし、中世前期に継続する集落の状況はまだ十分に把握できていない。なお、螢池北遺跡では9世紀後半から10世紀の建物群が散在的に検出されており、散村が展開することが判明している。



第3図 市内遺跡分布図



第4図 調査地点と周辺の地形

第Ⅲ章 発掘調査の成果

1. 基本層序

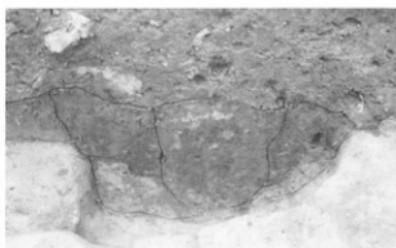
確認調査の結果、当調査区における基本層序は、盛土・耕作土・遺物包含層（遺構埋土）・基盤層によって構成されることが判明している。しかし、敷地の大部分は既存の建物基礎によって基盤層まで擾乱されているため、現地表から 0.3 ~ 0.5 m 下までは盛土、その直下に遺構埋土と考えられる黒褐色土層（東区）および基盤層（西区）を検出しただけにとどまる。

2. 検出した遺構と出土遺物

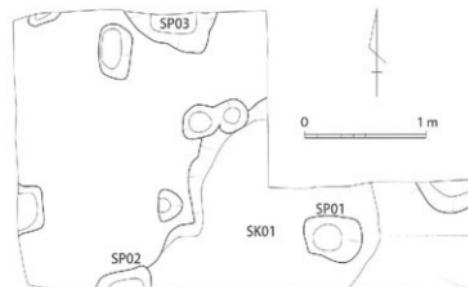
調査は二つの調査区にわけて実施した。ここでは二つの調査区を東区・西区と呼ぶことにして、それぞれの調査区の状況について報告する。

（1）東 区

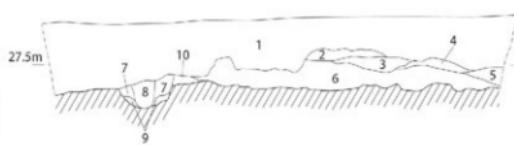
柱 穴 西区では柱穴 10 基を検出したが、調査範囲が極めて限定されているため、掘立柱建物や竪穴住居には復元できなかった。柱穴の平面形は、円形のものと長方形もしくは方形のものに区別できるが、これらに時期差があるのか、判然としない。また、出土遺物



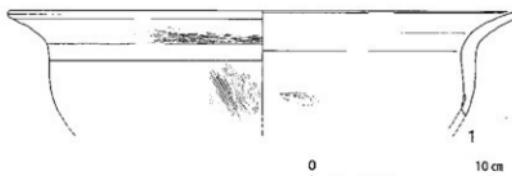
第5図 SP02 土層断面



1. 盛土
2. 黒オリーブ色 (Hue5Y6/2) 中～細粒砂、礫を多く含む。(耕作土)
3. 黑オリーブ色 (Hue5Y5/2)・黄灰色 (Hue2.5Y4/1) 樹齢～細粒砂
4. 黑褐色 (Hue10YR3/1) 樹齢～細粒砂
5. 黄褐色 (Hue10YR4/2) 細～中粒砂、極細粒砂を含む。
6. 黑褐色 (Hue10YR3/2) 細～極細粒砂、土器片を多く含む。(SK01 理土)
7. 黄灰色 (Hue7.5YR4/1 ~ 5/1) 樹齢砂
8. 黄灰色 (Hue7.5YR5/1) 極細粒砂、基盤層ブロックを多く含む。
9. 黄灰色 (Hue7.5YR4/1) 極細粒砂、基盤層ブロックを含む。
10. 灰褐色 (Hue10YR4/1) 細粒砂、黒褐色 (Hue10YR3/2) 細～極細粒砂を含む。



第6図 東区平面・断面図（1/40）

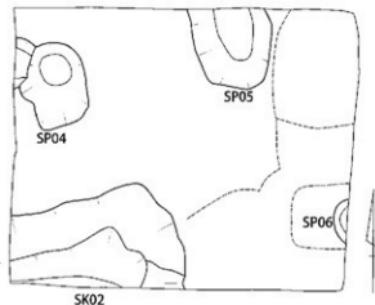


第7図 SK01出土遺物 (1/3)

も乏しく、SPO1から焼成不良の須恵器片が出土した以外に、時代等が判定できる遺物は採取されなかった。

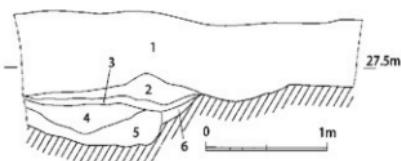
土坑 SK01は検出した範囲が限定されており、その平面形は判然としないが、検出した範囲から東西2.5m以上をはかる。耕作土直下で検出し、深さは0.25mをはかる。ただし、基底面は平坦ではなく、凹凸があることから、堅穴住居の可能性は乏しい。

土坑2からは、第7図1の遺物が出土した。1は土師器表で、口径は31.0cm、残存高は6.3cmをはかる。外面のうち、口縁部には横ナデを、体部にはハケを施す。内面は器面が剥離しており、調整は不明である。古墳時代後期以降の所産と言える。



(2) 西区

柱穴 東区では、3基の柱穴を検出した。これらの埋土には基盤層をブロック状に多く含む。柱穴の平面形は長方形と円形を呈するものが混在する。柱穴から出土した遺物はないため、時期は特定できない。また、調査範囲が限定されているため、掘立柱建物は復元できないが、SP04とSP05は長方形の平面形を呈することから、一連の建物を構成する可能性がある。なお、SP04・05の長軸長は0.6～0.7m以上、短軸長は0.5～0.65mをはかる。



1. 燐土
2. 灰褐色 (Hue7.5YR4/2) 植縫粒砂 壑化物を少數含む。
3. 灰褐色 (Hue7.5YR4/2) 植縫粒砂 基盤層ブロックを多く含む。
4. 灰褐色 (Hue7.5YR4/2) 植縫粒砂
5. 黒褐色 (Hue5YR3/1) ~褐灰色 (Hue5YR4/1) シルト~植縫粒砂 壑化物を含む。層下部の一部に基盤層ブロックが集中する。
6. 褐灰色 (Hue5YR4/1) シルト~植縫粒砂

第8図 西区平面・断面図 (1/40)

土坑 SK02は検出部分から東西1.4m以上、南北0.85m以上をはかる。最下層の一部（土層5）に基盤層ブロックが偏在する部分があるものの、中下層は腐植土を主体とする自然堆積層であり、埋没過程に人為的な要因は考えにくい。このため、風倒木の可能性もある。

土坑1からは土師器片が少量出土しているが、時期の詳細は判明していない。



第9図 SK02 土層断面

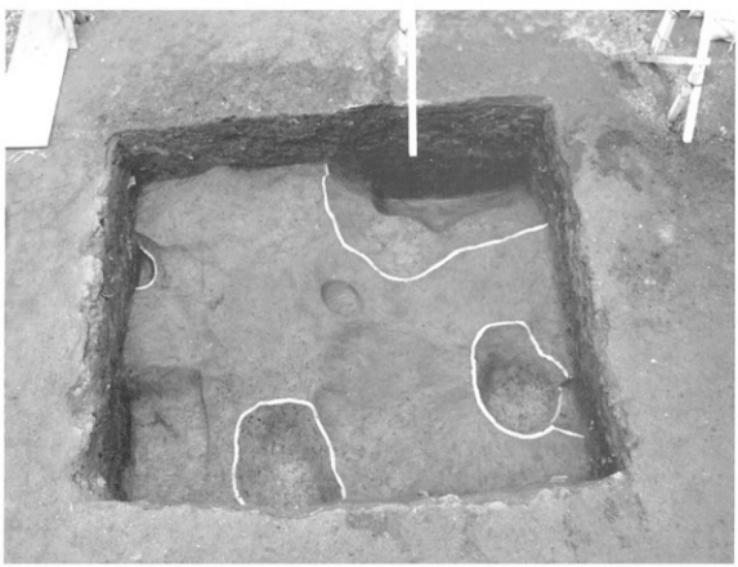
(3) 総括

今回の調査では、柱穴・土坑を中心とする遺構を検出した。これらの遺構から出土した遺物は非常に少なく、時期の詳細は明確ではない。しかし、ごくわずかではあるものの、時期の判明する遺物から、古墳時代後期の所産になると考えられる。また、二つの調査区は同じ敷地にあるものの、距離的に隔たっており、遺構間の連続性は検討できない。ただし、二つの調査区で検出した遺構の中では柱穴が最も多く、周辺における発掘調査成果をふまえても、一帯に古墳時代後期の集落が展開したことは間違いない。このことから、今回検出した遺構も、その集落を構成したものと考えられる。

よって、今後とも周辺において開発等を行う場合は、埋蔵文化財の保護に留意する必要があることを提言する。



図版1 東区全景



図版2 西区全景

報告書抄録

ふりがな	ほんまちいせきだいよんじゅういちじはっくつちょうさほうこくしょ					
書名	本町遺跡第41次発掘調査報告書					
副書名						
編著者	橋田正徳					
編集機関	豊中市教育委員会事務局（市町村コード27208）					
所在地	〒561-8501 大阪府豊中市中桜塚3丁目1-1 TEL06-6858-2581					
発行年月日	平成26年（2014年）10月31日					
所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
本町遺跡 第41次調査	本町4丁目 108-2・8	34°47'21"	135°28'02"	20140314～ 20140325	17.2 m ²	分譲住宅建築

所収遺跡	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項
本町遺跡 第41次調査	集落跡	弥生～近世	柱穴・土坑	土師器・須恵器等	主に、古墳時代の集落間施設構を検出した。

本町遺跡第41次発掘調査報告書

発行：豊中市教育委員会

豊中市中桜塚3丁目1-1

平成26年（2014年）10月31日

印刷：やまかつ株式会社

